

〔書評〕

吉田久一著

『現代社会事業史研究』・一九七九年・九月（勁草書房）

小 倉 襄 二一

本書は吉田久一氏の「生涯の仕事の一つ」である。『日本社会事業の歴史』（一九六〇年）『昭和社會事業史』（一九七一年）、あるいは『社会事業理論の歴史』（一九七四年）などの労作によって、著者はつねに社会事業史研究の領域における開拓的で精緻な論証を展開してきた。また、吉田久一氏は『日本近代仏教史研究』（一九五九年）や大著『日本近代仏教社会史研究』（一九六四年）でも知られるように仏教史、とくに近代における仏教史に新しい角度から接近、社会的な事象のなかで、仏教の史的展開をあとづけた歴史研究者である。私自身の研究の経過のなかでも、つねに該博、緻密な実証のうえにたった「吉田社会事業史論」は多くの学びと思考の方法へのもっとも大切なガイド・ポストともいべきものであった。多くの社会福祉研究者にとっても、吉田久一氏の研究によって、支えられ、教示

されている部分は予想以上に広く深い。こうした実績のうえに、さらに、本書が「生涯の仕事の一つ」として刊行されたことの意義は大きいものがある。

私は自分の社会事業研究の枠組や目標を『歴史的・社会実践』におき、その接近方法として、ケースならケースを現実的・主体的な生活感情で受けとめ、それを意見として整序しつつ、社会事業の思想や世界観を媒介に理論的体系化を試み、再び理論的实践に還すサイクルをたえず考えてきた。このコト、バにこの著作の広汎、多岐にわたる社会事業の現代史をたどる解説のキイ・ワードがある。それは、日本社会事業史研究にもとめられる、もっともふさわしい思考であるとも語っている。（同書六頁）。この記述をふくめて歴史叙述の前段として、序章「現代社会事業史の方法」の部分は、たんに、この著作を構成する

『現代社会事業史研究』・一九七九年・九月

基本というのみならず、現代の、むしろ、現実の「社会福祉研究」の在り方についての歴史研究者としての著者の重要な提言ともいうべき内容を含んでいる。とくに「史観としての諸類型」、「構想と諸科学の援助」、「現代社会事業について」（いずれも序章）の論述は、現実の「社会福祉研究」に欠落しがちなもの、たとえば論述の偏りや、風土、現実無視の論理・方法の空滑り、人々の生活史の重さ、史的な年輪、地域につきがさねられた歴史への想い……の復権についての助言、警告とうけとめてもいい内容である。

本書は、五部にその基本構成をとっている。第一部は「大正デモクラシーと社会事業の成立」、第二部「日本資本主義の危機と社会事業」、第三部「日中戦争・太平洋戦争と戦時厚生事業」、第四部「戦後の社会事業」、第五部「高度成長期以降の社会福祉」となっている。通史として意図されたものであるから従来の時代、時期区分の定説と著者の通史を編むうえでの考え方、視点も十分に加えられて、説得力のある構成となっているといえよう。序章において、「社会事業史料論」、「構成、意義、記述」に著者の採用した本書論述のうえでのとりにくみにもしめされているように、その資料の扱いは、実に広汎で、徹底的である。収載された数多くの文献・資料は、著者の視点によって、その特性、内容、意義にわたってきびしい選択が働いたものであって、各部の諸項目の歴史資料・説明などは、通史という押さえ方のなかでの確に配置されている。

大正デモクラシー期に形成された社会事業の原型、その機能から、かかわった分野は、昭和期、敗戦・戦後の今日の福祉状況に至る一つの原点である。明治期の慈善事業、感化救済事業の先駆的形態については、充分な関心とその脈絡への考慮を払いながら、現代社会事業として、この起点の重要性を明快に確定した立論になっている。各部にわたる領域の設定にも、著者の通史という枠組みからの取捨選択が働いているが対象論、制度、分野論、（法制、行政、施設論）それに思想的集約を各部について加えていくというのが基本である。

著者によるさきに公刊された簡潔な通史や特定の時期の研究をさらに現代社会事業史として補強し付加された記述として構成されている。併読すべき部分も多い。とくに、「日本資本主義の危機と社会事業」から、日中、太平洋戦争、戦時厚生事業にいたる時期については、さきの『昭和社會事業史』の論証と関連づけて解説する必要がある。

通史というとりくみのなかでの困難は、著者もその構成上の苦心のなかで指摘しているように、全体の総量と問題の比重、その選別のむづかしさである。記述が分節化され、主題と主題のうつりゆきや相互の関連、特定テーマの掘り下げの不足などはこうした構成にとっては避けることのできぬことがらである。著者の周到な史観や個別研究に支えられて、こうした限界を補填した構成になっており、むしろ著者のこの著作をベースとして各領域の個別研究をさらに開拓したり、あらたなアプローチ

を試みたりすることが本書の公刊された意義ともいふべきであらう。

本書のもっとも困難な部分は、高度経済成長以降の社会福祉の部門である。おそらく、現代社会事業史という枠組みにおいて、扱ひ得るか否かという根本が問われ、意見のわかれるところではないだろうか。つまり、戦後史研究のなかで、現代社会事業史として包括できる歴史の限度というものがあつたように思う。記述のうえで、著者の選択もややたしかさの点で、不足し、テーマの整序のうえで脈絡のたどりにくい箇所が、四章、70年代の福祉状況、五章、高度成長以降の社会福祉の思想と行動などの諸章にみられる。これは、現代社会事業史の時期区分やその限度、史観、論理の枠ぐみの「自己抑制」としていちど再確認すべきではないか。現代—通史—現段階（近接）という必然性はない。第五部の各章は、このままでは現代史という時代と状況、福祉状況の史的解明ということにはなりにくい、一面、この段階の扱いにくさ、矛盾をしめすものともいへよう。私は、島尾敏雄の『琉球弧の視点から』（一九六九年）のなかで、彼の述べた、正確ではないが、「無念を秘めた無数の状況」という表現に惹かれる。また、明日へのおびえ—「わが政治的直言」—のなかで、歴史を読むと、どの時代も血にまみれひとびとが、それをだまして引き受けているように思えるか、それがどうしようもなくおそろしい。与えられた生を外から抹殺されることなく、その自然死を望むことは世迷言にひとしい

『現代社会事業史研究』・一九七九年・九月

こと、あるいは与えられた生を世の中の危険でひそかに大事に引きのばそうとつとめることは、どこかまちがっているか」と記している。現代社会事業史の展開、その根拠は、こうした無念を秘めた無数の状況に深くかわって動いてきたにちがいない。軍事救護や、戦時厚生事業論は、いまに尾をひく『英霊論』、『靖国論』そして、天皇制の近代と民衆史の主題でもあろうか。本書から私たちは多くことを学び、そこをベースとして、人それぞれの歴史を書くことになる。色川大吉氏も『歴史の方法』（一九七七年）において、歴史叙述の方法についての反省と読み手、私たちの想像力の触発についての論述があつた。現代社会事業史のなかで、著者が問いかけているもの、ここをベースに一人一人が読み、書きあげていくための新しい方法と叙述を考えるべきであらう。それが、歴史研究とよばれるのか、否かはあまり問題ではない。そうした方法と叙述でしか、われわれが復元しえないもの、「無念を秘めた無数の状況」にどうように、制度や、今日的にいえば、社会システムやサービスがかかわってきたのか、どのようなかたちの棄民としてあつたのか、そのときの思想状況はなにを問うつもりであつたのか。

同志社大学人文科学研究所で、『留岡幸助著作集』（全五巻）が完結しつつあるが、私もこの作業にかかわりながら、留岡幸助という人物の軌跡、それを透かして彼のふれ、考え、かかわつた時代と状況、人々の姿態とはなんであつたか、そうしたことが去来した。

『現代社会事業史研究』・一九七九年・九月

吉田久一氏の『現代社会事業史』は私たちの歴史理解について重要なベースの提示であって、ここから、著者の要請や期待にこたえて、人それぞれの社会事業史研究へのアプローチへの可能性を拓いていくべきであろう。